



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第1主日 A年(2023年2月26日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 2章7—9、3章1—7節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 5章12—19節

福音朗読：マタイによる福音書 4章1—11節

しじゆんせつ 四旬節

四旬節は主の過越(主の復活)前の六週間を指します。具体的には灰の水曜日(アッシュ・Wednesday)から始まり、復活祭の前日(聖土曜日)まで続きます。四旬節には、主の過越しを迎える準備を行う典礼の季節と、主の過越の秘義に与る入信の秘跡の準備を行う典礼の季節という二重の意味合いがあります。特にA年は洗礼準備のための朗読箇所が準備されています。

「第一主日：誘惑」「第二主日：主の変容」「第三、四、五主日：洗礼の準備と回心」「第六主日：受難」がテーマとなります。

第一朗読の『創世記』は、様々な口伝(伝承)をもとに長い時間を経て形づくられていった書です。人間の創造物語は二つ記されていますが、1章の創造物語は紀元前6世紀末に祭司たちのグループによってまとめられたイスラエルの歴史に基づいています(通称：祭司資料あるいは祭司伝承)。今日の第一朗読で読まれる2章以降の創造物語はさらに古く、紀元前10世紀中頃にソロモンの宮廷でまとめられた最初のイスラエルの歴史に基づいているといわれています(通称：ヤヴィスト資料あるいはヤヴィスト伝承)

3節の「触れてもいけない」に注目してください。朗読から省かれている2章16-17節には次のようにあります。「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』」。ここで、神さまは「触れてもいけない」とは言っていないことに注目してください。また「園の中央には、命の木と善悪の木を」(2章9節)と二本の木があったことになっていますが、「善悪の知識の木」だけから取って食べることが禁止されている点にも気をつけましょう。つまり女は、神の言葉を忠実に守ろうとするあまり、神の言葉を拡大解釈して、自分の言葉を勝手に付け加え、人間の言葉を神の言葉のようにしてしまっているのです。イエスさまの時代の律法主義に通じる考え方に陥っています。

つづいて、6節の「賢く」^{かしこ}と7節の「裸」^{はだか}にも注目しましょう。「賢い」(アールーム) ことに気づくはずが、「裸」(エーローム) であることに気づいたという語呂合わせが見られます。2章17節では「食べるど必ず死んでしまう」とありますが、二人が死ななかったことに、いくつかの解釈の余地を残しています。旧約聖書には神の言葉がその通りに実現しないことが度々あります。神さまは、ご自分の言葉通りに実行なさらないところに、いわば神さまのためらいに、神さまの救済への深い意思が隠されているのかもしれない。

今日の第二朗読の箇所は、『ローマの信徒への手紙』の中で信仰義認(3章21節から8章39節)について述べられている部分から採用されています。信仰によって義(正しい)とされた人は、死からも解放されていると、アダムとキリストを対比しながら明らかにします。

14節の「アダム^{いはん}の違反^と」をここに留めましょう。違反はギリシア語でパラバシスというそうです。「越えて」を意味する接頭辞パラと「行く」を意味する動詞バイノーのから成り立っているパラバイノーの名詞形となります。元々の意味は「行き過ぎること、踏み越えること」となります。アダム^{いはん}の罪は神が「してはならない」と指示したものに背いたからです。アダムからモーセの間の人々が犯した罪は違反(パラバシス)ではありません。まだ律法が存在していなかったからです。それでも彼らに死が支配したのは、「アダム^{いはん}の違反^と」が普遍的なものだったからです。アダム^{いはん}の罪は神の言葉に背くということでした。それはすべての人に当てはまるのです。

福音朗読ですが、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3章17節)と証言した神の霊は、今度はイエスを荒れ野へと導きます。イエスさまは三回にわたって「試み」(4章1節 フランシスコ会訳)を受けます。

10節の「退け、サタン」を見てください。同じ表現は、フィリポ・カイザリア地方で受難を予告したイエスさまを非難したペトロへ向けられた言葉に似ています(16章23節参照)。「サタン」はヘブライ語から借用したことばだそうです。元々は「訴える者、誹謗する者」の意味だそうです。『ヨブ記』の1-2章にあるサタンは、人の悪や不正を探り出して神に告発する検察官として登場します。「人を悪へと誘う誘惑者、悪魔」としてこの言葉が使われるようになったのは比較的新しい時代になってからだそうです(雨宮師参照)。

【あじわいのポイント】

福音の中の三つの誘惑を整理してみましょう。第一の誘惑は、石をパンに変えろというのですが、生きていくためには神との関わりを捨てて、パン、つまり物質や人に依り頼もうとする生き方を暗示します。イエスさまは神の力を自分のために利用せず、「神の口からでる一つ一つの言葉」に頼ります。第二の誘惑は、神殿から飛びおりろというのですが、イエスさまは神さまを試すことなく、神さまが示した道を歩むことを選びます。ここには「今すぐ十字架から降りてみるがいい」(27章39-44節参照)が響いています。第三の誘惑は礼拝に関するものです。悪魔は神の栄光ではなく、世の栄光を選ぶようにと誘惑し、自分を拝めと求めます。しかし、神を拝むこと(10節参照)こそがイエスさまの使命だったのです。